

【漢検教育実践賞】優秀賞

小学校教育における国語力向上に向けての多面的多様なアプローチ

京都 私立ノートルダム学院小学校

教務主任 田島 美穂

国語部主任 秋田 幸絵

1.はじめに ~学校の特色~

本校は、ノートルダム修道女会を母体とし、カトリック精神に則り、教育活動を行っている。教育目標「得と知」を掲げ、徳育・知育の全人的な成長を願い、児童ひとりひとりの可能性が開花できるように支援する。さらに、世界に目を向け、わが国と地球社会に貢献できる人間の育成を目指している。

本校は、私立小学校であり、在校生約1000名を抱える、私立小学校の中では大規模・共学校である。1学年約170名の4学級構成で、クラス男女比は約1:1～5:6である。同学園で併設している中学校から大学までは、女子校であるため、男子のほとんどは、中学受験を経て、私立中学校に進学するという状況である。また、女子児童においても同学園ノートルダム女学院中学校への内部進学だけでなく、他私学共学校などへ進学するものも少なくない。

このような状況からも、本校児童・保護者のニードとしては、指導要領内容を標準のみとせず、それ以上の内容に触れ、学力を向上させたいというものである。したがって、全ての教科学習の根幹を成す、国語力のアップは必然で、それなくして、保護者のニードに応えることはできないし、学力の保障もできないと考えている。

「国語力」をつける・向上させるためには、「話す・聞く」「読む」「書く」の各々の領域において、あらゆる言語活動・チャレンジをたゆまず進めていく必要がある。言語活動の領域が偏ることなく、国語部がリーダーシップをとり、学校あげて、国語力向上に向けて取り組んでいる。

2.研究の概容

平成15・16年度 研究部(学校)目標 「評価を活かした授業改善」
国語部目標 「時代が求める国語力の育成」
～生きて働くコミュニケーション力の育成～

平成17・18年度 研究部目標 「感じる心・考える力を育てる」
国語部目標 H17年度 「ことばの感性を磨く」
H18年度 「対話力を育てる」

*平成15・16年度 全国的大規模的な学力調査・研究指定校(国語・算数・理科)
*平成16年度 国語力向上モデル校指定(京都府教育委員会より)

3.研究のねらい

国語力だけでなく、児童の学力を向上させるには、授業の質を上げること、より充実させること、効果的な授業方法を確立することが第一である。そのために、研究部や学年単位で研究し、教師自身の厳しい自己点検・自己評価を行い、教師間で切磋琢磨し、評価の開発やその有効利用を行う。さらに、指導と評価を一体化させ、授業改善をはかり、授業の質を向上させる。

4.研究の内容

- ① 国語力の基礎・基本を明確にするような授業研究の実践
 - ② 国語力の土台作り　I「読書環境の充実・児童読書活動の啓蒙・促進」
II「漢字能力向上にむけて」
 - ③ 指導とその効果・結果を客観的に評価するシステムの研究・実践
 - ④ 国語力向上につながる明確な目標設定・モチベーション向上への取り組み
 - ⑤ 専門家との連携・協力による教員の研修と児童への指導
- 付足 平成18年度からの新しい取り組み

①国語力の基礎・基本を明確にするような授業研究の実践

授業研究・研究発表会実施

国語力に限らず、児童に学力をつけるには、教師の指導力向上・指導技術の向上が必要不可欠である。そのために、教師の研修や授業研究を重ねなくてはならないのはいうまでもない。

本校では、まず、教員の各研修会への参加を促し、同時に校内研修の充実を図った。

研修としてはまず、夏期校内研修会がある。夏休み中に、校内研修会を2日間設けている。この「夏期校内研修会」は、元京都市教育委員長であり、本校前主事・前理事長であった故・池田正太郎先生のご指導のもと、1965年より40年来、実施してきたものである。この夏期研修は、夏休みまでの指導や児童の様子を振り返ることで、研修のテーマを設定して取り組む。ふさわしい講師を招いたり、各学年ごとだけでなく、日ごろと違ったグルーピングを取り入れたりと、マンネリにならないよう、工夫している。しかしながら、まずもって大切なのは、マンネリ化させない教師の意識である。

この夏期校内研修会とともに、1970年より、その年度の主な教育実践をまとめている。「研究と実践」というタイトルのもと、各教科の実践の一部を記録したものである。その「研究と実践」の巻頭に毎回校長の言葉が掲載されているが、主な内容としてはやはり、絶えざる教師の研究・研修・勉強以外に、指導力向上の手は無いということである。国語力向上のみに限定されないが、これなくしては、何も語れないである。

前述した、脈々と続く校内研修のマンネリ化を防ぐためにも、教師にとっても明確で具体的な目標は必要である。その具体的目標の一つとして、平成16年度以来、毎年、公開授業研究会を実施している。平成16年度は、本校創立50周年を記念して、公開授業研究会を開催

して以来、本年度で3年目を迎える。また、「研究と実践」は実践の一部の記録にとどまつたので、公開研究授業の全記録として、指導案集を発行している。この、公開授業に向かって、毎年、前述した研究部目標に即し、教科研究部ごとの目標を持ち、各学年単位や、研究部単位でまず研究・討議を重ね、授業研究を行う。

また、その公開授業研究にむけて、事前や、公開授業の反省を含めて、その事後に、各教科ごと年度に1回以上、校内授業研究を行い、教師間で互いに厳しく意見を交換しながら、よりよい指導方法・授業方法の確立に努めている。

国語投げ込み教材導入

国語科では、教科書単元以外の教材(数作品)を投げ込み教材として取り入れ、各学年指導している。それは、現在の教科書掲載教材だけでは、量的に物足りないと感じているからである。

平成元年より進められてきた「ゆとり教育」の具体的策として、平成13年教科書改訂により、いわゆる「3割削減」が実施された。当然ながら、国語教科書においても、内容・掲載作品は減った。本校は公立校に先駆けて、平成12年度より、週休2日制を実施してきたが、学習内容の削減は行わず、授業の効率化・指導の質の向上により、平成13年度前の学習内容を原則維持していく方針を学校として固めた。具体的には、それまで、1校時45分授業であったのを40分授業とし、3年生以上には、7校時を実施。前述したように授業の効率化を前提として、授業数の削減を可能な限り少なくした。まずもって、量的・時間的に維持したということである。

投げ込み教材は、学年の意向を取り入れながら、国語部や図書部教員を中心に検討・選択する。選択した国語教科書(現在は光村)以外の教科書、文溪堂「手のひら文庫」や児童文学作品等から選定している。

投げ込み教材を指導するにあたって、各学年の国語科担当教員が教材についての評価規準を明記した指導略案を作成し、授業を実施した。これにより、投げ込み教材を扱う授業でも、目標の明確な授業の実践に近づいたといえる。目標が明確であることは、授業を受ける児童が、モチベーションを上げ、意欲的な取り組みをしやすいということである。今後の課題として、現在実施している投げ込み教材の検討～時代と児童に最もふさわしい投げ込み教材かどうかの検討～があげられる。

国語部重点目標

平成15・16年度は、国語科では「生きて働くコミュニケーション力を育てる」ことを目標に、平成15年度は、コミュニケーション力を支える土台作りの徹底、平成16年度は、土台作りから発展に移り、関わりを大切にし、自分らしく表現することに重点的に取り組んだ。土台作りとしては、「語彙数を増やす」ことを重視し、言語操作活動の場をより増やすことを徹底した。具体的な児童活動については、あとで、項目別に述べる。

この2年間を踏まえて、平成17年度は「ことばの感性を磨く」こと、平成18年度は「対話力を育てる」ことを重点目標とした。「討論」ではなく「対話」力である。それまで、いわゆる「ディベート・討論」を高学年では重点的に指導してきた。「討論」とは勿論、相手の意見を聞き、

踏まえた上ではあるが、「相手を説得すること」、「自分の意見の優位さをアピールし相手に同意させること」が、目標になっていた。子どもにとっては、相手の矛盾点を突き、相手の論理を崩すというような、さらに攻撃的な目標になっていたと思われる。この現在の時代背景そのものを映し出しているといえる。論の上で、相手を打ち負かすことが必要な社会背景であることも事実である。だからこそ、これから時代を生きる、新しい時代を切り拓く子ども達には、討論ではなく「対話」を体験・体得してほしいと願っている。この「対話力」=自分と異なる相手の意見を、まず受け入れることの育成は、国語科のみならず全教科的に必要と考えた。そして、まず、国語科から「対話力」育成に向かって取り組みを始めたところである。

「対話力」を育てるために、低・中・高学年にわけて、さらに明確な目標を設定した。

- ・低学年:「伝えよう」………1年生:「ふさわしい言葉遣いを」2年生「聞き手を意識して」
- ・中学年:「伝え合おう」………「互いの意見を尊重して」
- ・高学年:「対話しよう」………「様々な角度から考えよう」

低学年・特に導入期の1年生においては、グループやクラス単位での話し合い活動への足がかりとして、二人組での対話練習から始めた。その際、あえて、目隠しして話すなどし、アイ・コンタクトの重要性を体感させ、「目を見て聞く」「目を見て話す」ことを重視させた。2年生以上では、前期段階では、グループでの話し合い活動を、今まで以上に取り入れるよう工夫し、後期にクラス全体としての話し合い活動が、討論とは違った、相手の意見を尊重しながら、自分以外の角度・視点から考えた意見を出す話し合い活動につながることを願っている。

参考:国語部目標

平成12・13・14年度	「感じる心・考える力の育成を目指して」(全教科統一目標)
平成15・16年度	時代が求める国語力の育成～「生きて働くコミュニケーション力の育成」～
平成17年度	「ことばの感性を磨く」
平成18年度	「対話力の育成」

②国語力の土台作り

I 「読書環境の充実・児童読書活動の啓蒙・促進」 II 「漢字能力向上にむけて」

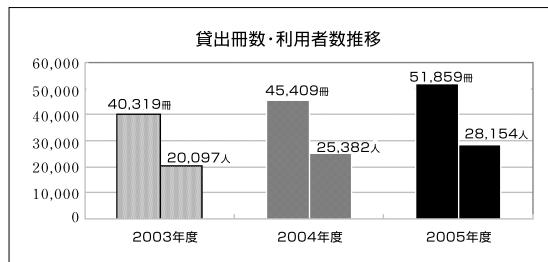
I 「読書環境の充実・児童読書活動の啓蒙・促進」

「読書」は国語力だけでなく、あらゆる教科、また、教科にとどまらない「生きる力」ともいうべき力の土台作りの第一歩であると、確信している。その第一歩である「読書」活動を推進するために、1読書環境の整備・充実 2学校と保護者が一体となっての読書啓蒙活動 3読書活動の機会の充実・増加 4プロの導入(児童図書専門家のアドバイスを受けながら読書活動を推進する)に取り組んでいる。

上記の結果、図書室における貸し出し冊数は、年々増加していることがはっきりした。

それまでも、当然のことながら、「読書」は学校として推進してきた。ただ、情報化社会といわれるよう、子どもたちの周りにも、否応なくあらゆる情報が錯綜していること、情報伝達・入手のツールが、書籍・新聞・雑誌よりも、ラジオ・テレビそして(携帯電話を媒介としたもの

も含めた)インターネットなどからのほうが、優位になったことなど、子どもたちを取り巻く環境の変化は大きい。同時に、子どもたちも含めた「活字離れ」が叫ばれて久しい。その中で、それまで同様の読書啓蒙活動では足りないこと・読書推進活動の見直しが必須であることを自覚した上の、読書啓蒙・推進活動の強化である。



1 読書環境の整備・充実

・学校内図書室の整備・充実

環境整備は、大切である。全てにおいて「量より質」「見た目より中身」が大切なのは言うまでも無いが、未熟な子どもたちにとって、量や外見の充実・整備は、それだけで、まず、図書室に足を向かわせ、読書の活発化につながることは間違いない。ただ、費用と時間のかかることではあるので、本校40周年頃より、図書館改装に向け計画し、五十周年記念の1事業として実施することを決定。資金と時期を検討した。

平成16年度に創立50周年を記念して、図書室を改装。校舎を建て替えず、スペースの有効利用や、廊下壁に書架を配置するなどの工夫を凝らし、図書室として、それまでの約1.5倍の広さと実感できるようにした。また、室内壁面は、全て天井までの書架にする・中には、高さの低い書架を新たに配置するなど、蔵書数の増加を可能にした。さらに、図書室入口付近に曲線の書架「トピックスコーナー」を設け、学校行事や学年行事、季節に合わせた図書のディスプレイを可能にした。それまで、書架等は、どちらかと言えば、重厚な色合いであったが、落ち着き且つ、明るい雰囲気になるよう、書架や床・机のみならず、カーテンや置物の色合いに至るまで、本校教員と様々な業者の方々と、逐一、意見交換しながら進めた。この点においては、教員の知識だけでは偏ったものになり、また逆に、業者任せでは、本校児童にふさわしいものは出来ないと考えたからである。中でも、児童書店「きりん館」吹田様の細部にいたるまでのご助言や、ふさわしいスタッフのご紹介は大変有難かった。ここに感謝を伝えたい。



これらにより、「明るくやわらかな雰囲気の図書室」が完成し、子どもたちが、学校の中で大好きな場所の一つに選ぶこととなった。まず、外見的・視覚的に読書活動を推進することができた。

また、学校内図書を全てコンピューターによるデータ管理に切り替えた。平成17年度内に全ての図書にバーコードが張られ、データ管理の基礎作りは終了。貸し出し等の管理パソコンを3台設置。これにより、貸し出し・返却活動がスムースに行われるようになり、短時間

でも多くの児童が貸し借りしやすくなっただけでなく、学校図書において全児童の貸し出し冊数・種類などの把握が容易に可能になり、指導や評価に活かしやすくなった。

また、念願の図書室専用パソコンを3台設置し、「ポプラディア」なども導入。児童は、それまで新館のコンピューター教室に出向いていたのが、図書室にてインターネットによる調べ学習も可能となった。

現在、図書室には約2万3千冊、「学習センター」に高学年用社会科調べ学習用図書:約100冊、「サイエンスコーナー」に理科関係図書:約300冊、「マリアンホール」(多目的ホール兼ランチルーム)に約200冊、学級図書として、約100冊(各学級・24学級)配本している。学級図書については、年に2~3回程度、夏休み・冬休み期間を利用し、中身を入れ替えている。常に、身の回りに図書がある環境づくりを達成することで、「時間があれば読書する」習慣づけがより実現しやすくなった。

2 学校と保護者が一体となっての読書啓蒙活動

本校は私学であるため、児童は京都市内にとどまらず、京都北部、滋賀県や大阪府などから通学する児童も少なくない。そのため、公立校に比べ、地域性は大変薄い。その薄い地域性をカバーするためには、保護者の協力が絶対に必要である。前述1のように、物的環境だけを整えても、児童読書活動の充実は困難である。物的環境に、質的支援・推進する環境が整って初めて、読書環境の充実が実現し、児童読書活動が活性化するはずである。また、この質的支援は、時代や児童の様子、取り巻く環境によって変化させなくてはならない。一度活性化すればよいわけではなく、毎年入学し、進級し、卒業していく児童とともに、活性化させ続けなくてはならない。ここでも、目新しさが必要である。

本校保護者会(「父母の会」)には、自主的サークル活動があり、その一つとして、「図書サークル」も存在する。読書啓蒙において、保護者協力の一つとして、図書サークルの活動の発表が、児童に直接関わる場の設定となるように、積極的に連携を行っている。

図書サークルの本来の目的は、保護者の親交を深めるというものであり、10年前は、児童に直接関わる機会は年に1・2回実施される大型紙芝居披露くらいであった。学校が、図書サークルに児童に関わる活動の計画・増加を依頼したところ、趣旨を十分ご理解くださいり、様々にご計画くださいった。毎年、新しい取り組みを、保護者自らがご提案くださるまでとなつた。

例えば、図書サークルによる朝読書時間帯や中間休み時間の「読み語り・読み聞かせ」「紙芝居」「朗読会」「朗読劇」などである。また、毎年行われる本校「学院祭」でも、毎年趣向を凝らした、毎年異なるイベントを実施してくださっている。

実施時間については、昼間休みなどの授業時間外利用はもちろん、授業としても、週1時間設定の「読書」の時間をあてるなどもしている。授業時間を割く場合は、もちろん学年教員とともに、事前に内容を検討して実施している。近年残る実施例としては、本校教



員とともに、「詩の朗読劇」の実践である。1学年約160名の児童を対象にし、ホールに集め、保護者は目立たぬように黒子の衣装で朗読劇に臨んでくださった。数名ずつまた、単独での朗読、位置を変えて、照明を工夫してなど様々な工夫を凝らして行われた。「詩」は、児童にとって、取り組みやすい反面、短いが故に飽きられやすい面も併せ持つと考えるが、これにより、児童は、行間に込められた背景や想いがあることを、心を持って理解・実感することにつながったと思う。実施後の感想には、拙いながらも、文字に現れないものを感じ取ったことが書かれており、図書サークル様に感謝として、差し上げたところ、非常に喜んでくださった。そして、さらに、保護者の方々は、子ども達に「授業として価値をもつ」ものとしての活動をしなければならない=読書啓蒙活動につながるという、高い意識を持って活動する意欲を増して下さることにつながった。今年度も、練習・準備などにも大変熱が入っている。

今では、子ども達にとって、自分の好きな分野以外の読書・図書の楽しさに触れる一面も担っていると実感する。その活動には、私達教師も脱帽するほどであり、毎回、子ども達も、その催し等を楽しみにしていて、催しの度、参加児童があふれかえっている現状である。

3 読書活動の機会の充実・増加

①で前述したように、環境的に「時間があれば読書」を可能にしただけでは、児童の読書活動推進は、まだ不十分である。本校では、環境の充実と共に、学校時間内での読書の機会の増加に取り組んだ。まずは、学校挙げて、校長自ら「寝ても覚めても読書」という標語を打ち出し、毎朝行われるテレビ放送で児童全体に呼びかけ、家庭配布の週報等にも記載し、保護者の理解と協力を求めた。

「朝読書」：週に1時間の読書の時間を国語カリキュラムの中に設定し、その時間は図書室利用において、そのクラスを優先させる仕組みは、昔から実践してきたことである。しかし、子どもたちの活字離れが深刻になり、広島から「朝読書」が提言され始めた。本校校長も率先して、教育研究雑誌に載った広島公立校に問い合わせたり、訪問したりした。そして、平成16年度より、毎日「朝読書」に切り替えた。

「切り替えた」と言う言葉は、それまでも、朝の自習時間（職員朝礼時間・10分）に学年・担任裁量により「朝読書」を週に数回実施していたのを、全校「毎日」としたからである。読書以外の日の朝自習には、計算練習・漢字練習を始め、ことわざ・俳句・短歌暗記、社会科暗記プリントなど様々に実施してきたため、「読書」に限定することは、計算・漢字力等の低下につながらないかと、教員間でもかなり議論した。しかし、「読書は全ての学習の基本である」こと、子どもを取り巻く環境の変化を考え、実施に踏み切った。

「朝読書」についてはまた、まず、「担任は必ず教室にいること」「共に読むこと」を徹底した。朝の職員朝礼を週1回に減らし、連絡事項を放課後の職員会議で伝達するなどの工夫も行った。副担任を各学年配置しているが、副担任も各学年廊下で読むことも行った。児童にとっては、最も身近な先生である担任の先生が読む姿を見ることは、環境的に大変重要なからである。

その結果、朝読書時間帯に訪れた参観者の方々が、その静まった学校の様子に一様に驚愕されるほど集中して読むようになり、落ち着きを持って、始業に臨めるようになった。さらに、

副産物として、その静まった環境は、遅刻しにくい環境ともなった。

平成16年度に実施した「朝読書アンケート」によると、「読書の時間が増えた」・「読書する本の種類が増えた」と応えた子どもがほとんどであった。また、「先生の読んでいる本の題名を知って」いて、「その本を読みたい」と思っている子ども達が少なからずいたことも特筆したい。機会の充実は、環境・機会と、やはり「教師の姿あってこそ」であること、子ども達は教師の対応や態度に、敏感に反応することを再確認した。

「隨時読書」：校長の「寝ても覚めても読書」を合言葉に、給食を食べた後の昼休み時間や登下校中の通学時間、学校検診時の順番待ち時間など、少しの時間でも、常に本を携帯し、読むことができるよう、積極的に子ども達に働きかけた。教師の「本を持った？」この一言の声かけが大切なである。あらゆる場面において、待ち時間は存在する。「待っている間は本を読む」この声かけを全校的に実施した。最初は、「間があったら体を動かしたい」と思っていた児童も、習慣づけにより、苦なく読書するようになった。もちろん遊び時間を減らしたい考えや想いは全く無く、小学校期において、体を動かすこと・遊ぶことは大変重要だと認識している。ちなみに、平成11～13年度は、文部科学省より「体育推進校」の指定を受け、体育教科にとどまらない運動体験の増加にも取り組んだ。それと合わせて、児童の読書の習慣づけを強化したのである。児童は「暇があったら読書するのは当たり前のこと」と認識していることは、普段の発言や様子からうかがえるようになった。例えば、算数テスト実施中に、テストが早くできた児童が「先生、本を読んでもいいですか？」と質問するなどである。

さらに、読書を楽しむ児童は増えたといえる。読書に親しむためのはじめの一歩は、本人にとっては、ややハードルが高く見えたとしても、一度超えてしまえば、本の持つ魅力に必ず惹かれるものだと実感した。

4 プロの導入

本校図書室には、現在、常時、専任の司書教諭が1名いるのみである。これは、最近の同規模の小学校図書室においては、人員的に少ないともいえる。同じ京都にある私学小学校では、常勤1名+非常勤2名をおいていらっしゃる。本校は、1,000人規模でもあるので、その人員面を補うために、司書の人員増では無く、いわゆるプロ＝児童図書専門店（京都・きりん館）と連携し、フォローをお願いした。もちろん、これまで図書購入は、書店を通じて行っており、新刊本の選定にあたってご意見を頂くことはあった。五十周年図書館改装を機に、ご好意による協力ではなく、システムとして確立した児童書専門家との連携を試みたのである。

内容としては、新刊本の紹介と購入にあたっての選定、図書室でのレイアウトの工夫など種々様々、図書室・児童読書推進に関わる全般である。例えば、図書室レイアウトなど、教員だけで行うと、どうしても、教育的配慮というか、「教える」ことが先にたっての選定やレイアウトになりがちになってしまふ面を補っていただいている。また、溢れる冊数の新刊本の中から、ある程度絞って、ご紹介いただけるのは効果的である。選定時間短縮になっていることは勿論、選定の本の分野・種類が偏らないことや、深い児童図書の知識に教師が容易に触れることができるため、授業や学校・学年行事に即したタイムリーな図書紹介なども可能である。（ND読書百選参照）

また、読書推進の一助として、図書館便りも月に1回発行し、児童に配布しているが、その記事の内容へのご助言も頂いている。特に、本紹介の際、最近の児童図書の人気傾向や、話題についていただく情報は貴重である。

Ⅱ「漢字能力向上にむけて」

読書と共に国語力向上のために、積極的な「漢字学習」への取り組みは不可欠である。漢字力は、国語力に直結すると考えている。「漢字学習」において、繰り返し学習なくして向上はありえないものであるが、子ども達にとって、この繰り返し学習が苦痛の種であるというのも、また事実である。この繰り返し学習を徹底するためには、1高いモチベーションを維持できるような目標設定と、2漢字自体への興味・関心が高まるような授業の実施、3漢字学習の定着を定期的に測り、指導に活かすことが大切だと考え、国語部のリーダーシップのもと、全校挙げて漢字学習にも積極的に取り組んでいる。

1 高いモチベーションを維持できるような目標設定

「日本漢字能力検定全校受検」

本校では、1970年代より、漢字学習の定着を図る毎時の漢字小テストと共に、「漢字大会」と銘打った、校内漢字テストを年3回・各学期末に実施し、定着を図ってきた。(この漢字大会については、あと「評価」のところで説明する。)この「漢字大会」実施も、児童の漢字学習の目標の一つにはなっている。が、30年来実施てきて、児童にとっても、我々教師にとっても、日常化し、目標としてのインパクトにはかけてきたことをここ数年感じてきていた。「漢字大会」よりも、さらに高いモチベーションを持つことのできる目標の設定は、1990年ごろより国語部として大きな課題となっていた。

漢字の得意な児童には、これまで、学年配当漢字のみにとどまらず、どんどん学習するように指導してきた。このようなもともと、漢字学習に自信を持つ、漢字学習へのモチベーションが高い児童において、学習へのモチベーションをさらに高めるために、この「漢字大会」の充実と共に、本校独自の「校内漢字検定」を設けてはどうかという案が、平成10年頃、まず、国語部からだされた。この校内漢字検定の案は、文字通り、校内独自に全校統一の検定級を設け、検定プリントを本校独自に作成し、合格した児童にはどんどん上の級をチャレンジさせるというものである。

さらに検討した結果、漢字学習が苦手な子も得意な子もどちらもが、高いモチベーションを持つことのできる目標として、校外でも通用する、より客観的な評価であり、資格としても有効な「日本漢字能力検定」受検が最適であると判断した。実は、国語部教員の中に、自身的資格として、日本漢字検定級を取得しているものがおり、漢字検定受検に臨むにあたって実際にやった準備や、資格の取得によるメリットを自身の経験として持っていたことは、導入への大きな引き金となったと言える。

漢字検定導入初年度である、平成12年度は、希望者受検を導入、翌平成13年からは、全校受検を導入した。

この希望者受検実施のデメリットとしては、①参加者が、もともと漢字学習に自信のある児童や、漢字学習に熱心な保護者の児童に偏ったこと②受検料の徴収に大変労力を要することが挙げられる。②については、重要視されないかもしれないが、正直、様々な仕事を抱えている上で、事務的作業の効率化は重要であると考える。受検者の費用・現金を一人ひとり確かめ、合計し、また確かめるという作業は、怠るわけには当然いかない上、時間と気力を要するものであった。

平成13年度から、1年生から6年生まで全員が、学年該当級以上を受検することとした。結果として、児童全員に、目に見える形の「漢字検定合格」という明確な目標設定ができ、モチベーションは確実にあがった。漢字学習が苦手な児童は、「該当級に合格したい」、得意な児童は「上の級に合格したい」とそれぞれの目標を持つことが可能になった。

ここで特筆したいのは、「学年該当級以上」の検定級受検を徹底した、という点である。私学である本校でも、漢字学習が特に苦手、敬遠する児童は、過去も現在もいる。また、本校は、帰国子女受け入れ校として、現在も約80名以上の帰国子女が在籍する。特に、帰国生で海外在留暦が長いほど、概して、漢字学習は苦手である。どの教科においてもであるが、苦手教科において、学年が上がるほどその定着・理解には差がでてくる。学年該当より下の級なら合格するだろうということは容易に考えられ、苦手児童にとっては、「検定合格」ということ自体が、漢字学習への意欲を起こすという考えも出された。しかし、帰国生も含め、漢字に対して拒否的感覚と言ってもいいほどの感覚を持つ児童に対しても、学年該当より下の級を受検することを認めなかった。高いハードルにあえて臨ませ、失敗した時のフォロー・補習を学校として責任を持って、十分に行うこと決定した。

初年度、合格率は9割を超える、「合格」した児童の学習の達成感は、こちらが期待した以上に大きいものであった。目に見える「○級合格」と書かれた合格証は児童にとって、大変大きなものであった。

漢字学習の苦手な児童、下の級なら…と心配した児童の中には、保護者の熱烈な励ましと学習への声かけを頂いたこともあり、該当級に合格できた者もいた。その喜び様は、教師にとっても大変励みになるものであった。また、当初、不合格によりかえって自信を喪失するのではないかと心配もあった不合格者は、5%ほどいた。しかし、不合格の児童は、自信の喪失よりも、漢字検定発行の結果の詳細を見て、「あと○点で合格できた」「書き順問題で失点が多い」などの確認がされたことで、自分の頑張り・努力が明確に分かり、自信の喪失というより、自分の学習に対して、ある程度の達成感を持つことや、漢字学習の指針を持つことができた。

これは、教師にとっても同様である。苦手な児童に対して、漢字学習を押しなべて「やれ、やれ」といっても、なかなか意欲的に取り掛かれるものではない。各児童の漢字学習において、どの部分を補っていけばよいのかが明確であれば、指導を絞って集中して補っていけばよいのである。点数のみにとどまらない、「どこがどのように達成できなかったか」と、明確に結果を示すことは、児童のやる気をそぐどころか、起こすものであることを、私たち教師一同思い知り、評価の研究にもつながった。

導入以来、合格率は上昇し続け、平成16年度には、合格率が98%を超えることができた。前述したように、これは、「明確・目に見える目標」の設定が、子ども達のモチベーションを上げたことの証であろう。

また、予想外の喜びであったが、平成13年度全校受検開始以来、漢字検定受検者300人以上という枠の小学校の中で、合格率第一位を獲得し続けることもできた。「文部科学大臣奨励賞」という「学校の表彰」を受けたことも、個人個人の受検ながら、子ども達同士が「共に、一緒にがんばろう」という意欲へとつながり、いわゆる「受験」のような殺伐とした競争にならなかった一因である。保護者に対しても、学校の取り組みとして、明瞭な結果報告ができたことも、保護者の理解と協力を得る上で、大変有難かった。このような賞の設定を設けてくださったことに感謝したい。

合格率上昇だけでなく、漢字の得意な児童が学年該当級以上の級を進んで目指すようになったのも、嬉しい結果であった。準会場として受検できる最高級である、2級にチャレンジ、そして、合格する児童が現れ始めたのは嬉しい限りである。

このように、個人として「合格」「資格の取得」、学校として「表彰」されることで、保護者の漢字学習への協力もこれまで以上に厚くなった。

2 漢字自身への興味・関心が高まるような授業の実施

これまでも、様々な漢字学習の研究を通して、子ども達は、漢字の「読み」よりも「書き」が苦手である場合が多いことは明らかであった。逆に言うと、「読み」に対しては、苦手意識は低い。漢字テストや漢字検定の結果からも明らかである。このことを逆手に取り、書くのは難しい漢字の熟語であっても、読むことができれば、漢字学習への苦手意識は薄れ、取り組みに積極性が出ると考えた。

本校では、平成15年度の国語力の土台作りの一つとして、「漢字フラッシュカード」を導入した。「TOSS大阪みおつくしの会 神谷祐子先生作成表」を参考に、カードを作成。この実践は、漢字熟語のカードを出されたらすぐにどんどん読む、というだけのものである。小学校で学習する1006字と、一部それ以外の身近に触れる漢字を、テーマごとに熟語の束にしたものと、ただ読むのである。実施一回に熟語10個読むことを年間35週続けたとして、1年生で350の漢字を読むこととなり、3年生ではほぼ6年間の漢字を読ませることができる。

フラッシュカードの実施は、授業開始時に、1~5分程度で行うのが効果的である。何十分も使って繰り返すと、児童は飽きるだけである。この時間制限は大変重要で、始業開始時、児童がすんなりと授業に集中する一手としての活用(無駄に教師が大声で指導するよりも)が、本校において、最もポピュラーであった。授業開始のときに、子ども達が学習へと向かい、集中させていく手立てとしても、フラッシュカードは非常に有効であった。

フラッシュカードによる学習は、児童にとってはゲーム感覚で、堅苦しい受け止め方や抵抗はなかった。教師が提示するカードを席順に、一人ひとり声に出して読む、列毎や全体で読むなどした。学年該当漢字の順列とは無関係に熟語群があるので、児童が読めないことへの劣等感を持つことなく、また、読むことの出来た児童は、自信を持った。「へえ」「ほお」と言うような声もあがり、学習していない漢字への抵抗が薄れたと思われる。また、新出漢字として学習する際、「既に読みを知っている」ことも、児童にとって学習への抵抗感を薄めたと考える。

高学年では、カードではなく、パソコンを用いてパワーポイントによるフラッシュカードを作成、実施した。「河馬」「河豚」などの「海の仲間」という分類でくるなどして、楽しめることを優先させた。昨今のクイズ番組でも、一部問題に取り入れられるようになり、児童は大変

意欲的に取り組んだ。児童にしてみれば、取り組んだと言うよりも、ゲームやクイズに参加した感覚のほうが強かったと見て取れた。

どの学年の児童にとっても、学年配当漢字以外の「未習漢字を読む」という課題は、児童にしてみれば「すごいことに取り組んでいる」という感覚を持つことができ、フラッシュカード学習への意欲は十分であった。漢字には様々な読みがあること、さらに熟語になると、特別読みが発生することを自然に楽しく学ぶこともできた。中には、自ら難読熟語を調べ、「これなんて読むか分かる?」と発問する児童も出てきた。これも、漢字に対しての興味・関心の高まりの表れであろう。

3 漢字学習の定着を定期的に測り、指導に活かすこと

この定期的に定着を測ることの実現は、評価システムの確立による。次項③で述べる。

③指導とその効果・結果を客観的に評価するシステムの研究・実践

教員が研修・研究し指導を行ったときこそ、その研究が目標・めあて・ねらいにかなったものとなったかどうかの確認が必要である。事前の研究や準備を十分に行うほど、逆に、教員は自己満足に陥りやすい。それを防ぐためには、外部評価を受けるのが、最善の方策だと考える。そのためにも、「公開授業研究」を実施している。(2003年度より毎年実施)

評価システムとして、本校では、ショートステップ、ロングステップなどに分けて評価し、児童の実態を把握することが大前提である。それら評価により、実態を把握、臨機応変に実態に合わせて指導する。そのためには、その評価システムの確立が必要である。システムの確立は、教員にとってだけでなく、勿論、子ども達・保護者にとって自己評価にもなり、有効なチェック機能を果たすと考え、以下のような評価を全校で実施している。

校内	*「学年テスト」	年3回実施 全学年(1年生は後期より年2回)
	*「漢字大会」	年3回実施 全学年(")
	*校内研究会	年度内に各教科1回実施
外部	*日本漢字能力検定	H12年度 希望者受検 H13年度より全校受検 年1回実施 全学年(1~5年生 2月頃実施 6年生は11月頃実施)
	*日本語文章能力検定	H16年度より 年1回実施 6年生のみ 11月頃 5~7級受検 5年生受検検討中
	*全国標準学力テスト	H14年度より 年1回実施 全学年年度末実施 H16年度より 1~5年生実施 6年生中学受験日等のため
	*公開研究授業	H13年度より 年1回実施(本年度11月22日) 一般公開

* 学年テスト

本校では、1970年代より、5・6年生に於いて「統一テスト」とよぶ、本校教員作成の学年統一の到達度を測るテストを作成・実施してきた。いわゆる定期テストに近いものである。これは、私学であり、中学進学の際もほとんどの児童と保護者が私立中学校に進学希望される背景もある。高学年で、校内で児童の学習の定着・到達度を確認し測るのは、評価、評価と呼ばれる以前から、本校においては重要課題であったからである。特に、男子においては、

進学中学を選定する判断材料のひとつとして、この統一テストが用いられてきた。教師にとっても、児童にとっても、保護者にとっても、である。テスト出題範囲は、「それまでに学習してきたところ全て」。単元テストとは、この点において確実に異なる。6年生のテストであっても、4年生時学習した単元が出てくることは、国語や算数においては当然と言えようが、理科・社会においても、往々にしてありえる。

評価のあり方が全国的に見直され始めた、平成10年からは、さらに基礎基本を徹底するために、「学年テスト」という名称に変更し、1年生から6年生まで、年3回(1年生は夏休み明けから、年2回)作成・実施している。作成は、原則、学年の教科担当者が行い、研究部・各学年で検討している。

「学年テスト」は、基礎・基本の定着を図るためのものである。以前の統一テストと同様、それまでに学習した範囲全てから出題する。もちろん、その学年の学習範囲は中心になっている。しかし、前述したように「単元テスト」とは趣旨が、決定的に異なり、期間をおいても定着しているか=本当の理解・納得につながっているかを、児童とともに教師が確認し、それまでの指導を振り返る手立てにするのである。

また、家庭学習を促すための一つの手立てとして、学年テスト実施2週間前には、プリント等で、学年テスト実施を保護者にも知らせて、家庭学習や復習を喚起し、子ども達の取り組みへの励ましをお願いしている。児童・保護者にとって、適度な緊張感と意識を持って、この学年テスト実施に臨んでおり、家庭学習・特に復習のよいきっかけとなっていることは間違いない。いわゆる「抜き打ちテスト」で、到達を確認するのと趣旨は完全に異なる。よく準備をすることを促す、つまり、家庭学習への示唆もふくんでいる。

結果についても、学年ごとに、本人得点だけでなく、点数による分布表・学年平均点についても、本人や保護者に、プリントや面談等で、全員に通知している。また、学年テストにおいて目標に到達できていない児童については、担任を中心に、学年担任団で、補いを行っている。

* 漢字大会

「日本漢字能力検定」受検を開始した後も、従来の「漢字大会」は定着を図る大切な評価としても、定期的に年3回実施している。この「漢字大会」についても、やりっぱなしにならないように、「エフォート」という振り返りカードに自分の振り返りを書き込ませ、点数、分布を記入し、保護者にも確認していただいた後、保護者からの励ましの言葉を記入していただいている。何においても、保護者の協力は不可欠である。「エフォート」は記録としてだけでなく、本人への励ましの証となることを願っている。目標を達成できなかった児童においては、補い学習を開始・奨励する。

ショートステップで実施する小テスト、年3回実施の漢字大会の実施を経て、最終目標として漢字能力検定に合格するという3段構えで、本校児童の漢字学習へのモチベーション・達成感は支えられている。

《「② 国語力の土台作りーⅡ「漢字能力向上にむけて」ー1高いモチベーションを維持できるような目標設定と定期的に定着を測る手立て」》の中で述べたとおりである。評価を確立することは、定着を測ることと同義もあると考える。

* 校内研究会

《 ④ 研究の内容 ① 国語力の基礎・基本を明確にするような授業研究の実践 》の中で述べたとおりである。研究授業とは、客観的評価を受ける絶好のチャンスであると認識している。

外部評価

* 日本漢字能力検定 * 日本語文章能力検定 * 全国標準学力テスト

《 ② 国語力の土台作りーⅡ「漢字能力向上にむけて」ー1 高いモチベーションを維持できるような目標設定と定期的に定着を測る手立てー「日本漢字能力検定全校受検」》の中で述べたとおりである。

「漢字能力検定」受検だけにとどまらず、日本語文章能力検定、標準学力テストなどにより、漢字学習だけでなく、国語の様々な領域についての客観評価を通して、日々の指導に帰していきたいと考えている。

* 公開研究授業

私学小学校連盟の中でも、本校でも数年ごとにおこなってきた。2004年の五十周年記念公開授業研究会以来毎年実施。

前述の校内での研究授業にとどまらず、外部評価を受けることは、教師が指導を客観的に振り返る上で欠かせない。学校外部の方々にも多くご参加頂き、ご指導を仰ぎたいと一同願っている。

④ 国語力向上につながる明確な目標設定・モチベーション向上への取り組み

「様々なコンクールへのチャレンジ奨励」

①～③で述べた中にも、「明確な目標設定」「言語活動へのモチベーション向上」につながるものが多く述べてきた。ここでは、上記以外の取り組みとして、「様々なコンクールへのチャレンジ奨励」をあげる。

本校では、長期休暇(夏休み・冬休み)をはじめ、年間を通して、様々なコンクールを紹介、奨励してきた。平成10年より、夏休み前には、学校として薦めるコンクールを一覧表にして配布、応募を呼びかけている。平成18年度、夏休みには、合計7つのコンクールを紹介した。

コンクール種類としては、作文・読書感想文・短歌・俳句・お話(スピーチ)などである。これらコンクールに応募することは、特に「書く」「話す」領域で自信を持っている子ども達にとって、いわゆる、力試し=チャレンジに他ならない。自信のある児童は、大変意欲的に参加する。外部評価であるコンクールに参加し、入賞できないような場合も、チャレンジすることによって得る経験は大きい。勿論、その場合の教師の励まし、応援等は不可欠で、再チャレンジを勧める。

また、反対に自信のない子ども達も、「コンクール」という明確な目標を与え、時には全員課題としてチャレンジさせることは可能性の開花につながると確信し、実施している。平成16年度から、特に意識して、「夏休みの宿題」として、指定したコンクールテーマにふさわし

い作品の提出を設定している。指定するコンクールの選定にあたっては、各学年、国語教科のみならず、他教科、特に総合学習のテーマとリンクさせが出来るものを優先して選んでいる。ちなみに、本校・総合学習のテーマとして、4年生は「環境」5年生「平和」6年生「DISCOVERY」であり、これに類するコンクールテーマは大変多く、ありがたいのが現状である。

学校という決まった集団の中では、高学年になるほど、自ら「どうせやってもよい結果は出ない」という思い込みは、苦手な児童においては強くなり、その苦手意識とでもよぶものが、子ども達の力を押しとどめていることもあると考える。外部評価・コンクールに参加するということは、苦手な児童にとっては、まさにチャレンジである。そのチャレンジが、外部コンクール団体において評価・表彰されたことは少なくなく、子ども達に、大きな自信と、「書く」「話す」分野だけにとどまらない積極的な取り組みを生み出す。また、周りの児童も、そのような国語に苦手意識を持つ児童、また、国語授業の中では、それまで目立たなかった児童が、各コンクールにおいて表彰されるのを知ると、「自分もやってみようか」という取り組み姿勢を生むという、好循環になっている。

コンクールの種類も数も、年間通して様々あるが、保護者、ましてや児童はなかなかその情報をキャッチしにくいのが現状である。種々様々なコンクールの中から、学校授業や行事等に即した、タイムリーなコンクールを選定することは、大変に重要である。これからも引き続き、この奨励は続けていく。

主な学校団体賞の受賞歴(過去3年)

受賞年月日	名 称	主 催	受 賞
平成16年1月	平成15年度NHK全国短歌大会	NHK・NHK学園	ジュニアの部優秀校
平成16年2月	第45回小学生お話しコンクール	京都女子大学	最優秀校
平成16年3月	平成15年度日本漢字能力検定	財団法人日本漢字能力検定協会	文部科学大臣奨励賞
平成16年3月	平成15年度実用数学技能検定	財団法人日本数学検定協会	文部科学大臣奨励賞
平成16年7月	第15回伊藤園お~いお茶新俳句大賞	伊藤園	優秀学校賞
平成17年3月	平成16年度日本漢字能力検定	財団法人日本漢字能力検定協会	文部科学大臣奨励賞
平成17年7月	第16回伊藤園お~いお茶新俳句大賞	伊藤園	優秀学校賞
平成17年11月	第29回「てのひら文庫賞」読書感想文全国コンクール	財団法人総合初等教育研究所	優秀校
平成17年11月	第10回「お茶の作文」コンクール	京都新聞社	学校奨励賞
平成18年1月	平成17年度NHK全国短歌大会	NHK・NHK学園	ジュニアの部優秀校
平成18年2月	第47回小学生お話しコンクール	京都女子大学	最優秀校
平成18年3月	平成17年度日本漢字能力検定	財団法人日本漢字能力検定協会	文部科学大臣奨励賞
平成18年3月	平成17年度実用数学技能検定	財団法人日本数学検定協会	文部科学大臣奨励賞

⑤専門家との連携・協力による教員の研修と児童への指導

* 小論文指導「白藍塾」との提携・協力

教師は、教えることのプロでなければならないのはいうまでもない。しかしながら、教師それぞれ得意分野があるのと同時に、苦手分野があるのも事実である。国語・「書く」領域の指導においては、教員の主觀や個人的考えが最も出てしまう領域だと思われる。つまり、「書く」ことについては「教師自身の得手・不得手」が他よりも明らかであること、小学校期の「書く」領域では、特に、担任の「書く」こと・作文への思いや取り組み方によって、児童の取り組みが如実に変化してしまうと考えている。

「書く」ことは自己表現の一つの手立てとしても、必ず力をつけさせなければならない。ここでも、まず、「書く」機会の確保、そのようなカリキュラム、システムの確立が必要である。教員の主觀・得手・不得手に左右されることなく、一定レベルの質を保って指導するために、本校では、「書く」領域の専門家の協力・学校外部の力を補足的に導入することにした。国語研究会で、立命館宇治中学校のご実践の発表により、「白藍塾」(樋口裕一氏主催)をご紹介頂き、本校の作文指導にご協力いただくことになった。

大変強力なご協力であっても、基本的に直接指導するのは、本校教員である。作文指導に苦手意識を持つ教員が謙虚さを持って、学ぶ姿勢を持つこと、得意意識を持つ教員も、奢らず、白藍塾の指導から学ぶ姿勢を持つことを徹底することを最重要課題としている。

「白藍塾」の作文指導の中心は、「型」にはめた文章指導である。この「型」にはめることで、却って自由に、想像力豊かな内容で、筋の通った内容の文章が書けるという論理に、学校としても大変共感する。まずは、「型」を守ることが前提なので、何から、何を書けばよいのかという、苦手児童に多い疑問、取り組みへの弊害は減る。また、読み手を意識して、どうすれば「おもしろい」文章がかけるのかということについて、考え、工夫を凝らすことが出来る。

白藍塾導入による作文指導は、平成16年度より、6年生でまず実施。(初年度のプログラムについては、「卒業文集」のあり方を検討し、一つのテーマに従って、一時に、全員が書いた作品が載るのではなく、6年生で書いた中で最もよい作品が卒業文集に載るという形式にした。これにより、「書く」ことに対して、「卒業文集」という6年生児童にとって明確な目標が設定できた。明確な目標は、何においても常に必要であることは、前述したとおりである。「白藍塾」には、年2回の文章添削等についての教員研修、小論文指導についての授業研究への参加と協力、児童作品への添削指導、卒業文集へのコメント掲載などに協力を頂いた。児童に直接指導するのは、やはり教員であるので、白藍塾との度々の話し合い、指導のすり合わせは大変重要で、本年度も、国語部だけでなく、学年担任団全員が、話し合いや研修を行っている。

平成18年度より、6年生指導に加え、3年生以上の指導にご協力いただくことになった。これは、白藍塾提携の初年度「卒業文集」が今までにない出来栄えになったからである。一つのテーマに偏らないことは、読み手にとって、読んでいて楽しめるものである。「卒業文集」というものは、卒業生本人達が互いに他の友達の作品を読むだけでなく、卒業生保護者を

はじめ、多くの読み手を期待できるものである。にも拘らず、今まで、指導者である私達が、読み手を意識して書くことを重視してこなかったと反省した。この反省を活かして、学校行事や6年生児童の状況、社会的状況などを考えてテーマを考えるだけでなく、読み手も意識したテーマを設定した。

読み手を強く意識することは、書く意欲につながる。また、読み手を意識することは、「伝える」ことを目標にするということである。書くことにより、「自分の考え方・思いが整理される」に終わらず、「相手(読み手)を意識して書く」=「伝える」ことの学習へつながったと確実にいえる。

*児童図書専門店「きりん館」との連携

《 I「読書環境の充実・児童読書活動の啓蒙・促進」-3 読書活動の機会の充実・増加 -4 プロの導入》の中で述べたとおりである。

「学校教師だから、学校部外者には聞かない」「聞いても無駄だろう」というような偏ったプライドは捨て、謙虚な姿勢で多くの教育関係者、教育に関心のある方々の意見を参考にさせていただきながら、国語指導において「ノートルダムオリジナル」を作り上げることが、このノートルダム学院小学校の生きる道であり、児童にとって最良であると信じている。本校創立者・マザー・テレジア・ゲルハルディンガーが教育理念としてあげた、子ども達一人ひとりの「可能性の開花」に常に立ち返りながら、日々の指導を行っている。

付足

平成18年度からの新しい取り組み

* 国語特別講座

カリキュラムとは別に、同学園内中学・高等学校の教員等により、週1時間の設定で実施している。特に国語嫌いの児童、苦手の児童、また、国語とはこうであるという固い印象を持つ児童に対して、新しい国語的一面を体験させたいと願って実施している。

1・2年生では、「よむ」領域で実施。国語教員と共に、中・高の音楽科声楽教員が发声指導に携わるなど、「体でさまざまによむ」「全身でよむ」ことを体験させている。3・4年生では、「表現する」=「話す」「書く」領域を中心に、特別講座を実施。5・6年生では、「よむ」領域において、「深く読む」ことを目標に実施。

年度の途中ではあるが、子ども達の様子・反応から、まず、見慣れた小学校教員以外の教員が指導する目新しさ、普段の授業を指導する学年国語担当教師とは、異なる雰囲気・異なる指導の面白さは少なからず感じていると思われる。この講座により、一人でも多く「国語嫌い」が減ること、また、より「国語好き」がふえることを期待している。学力低下が叫ばれる今、「基礎基本は国語である」という思いを強くしている。

《ND 読書百選》百人の作家と作品を選びました。これ以上にどんどん読んで下さい。

<低学年にぜひ読んでほしい本>

井上 夕香	星空のシロ
いぬいとみこ	ながいながいペンギンの話
江戸川 乱歩	少年探偵団シリーズ
大塚 勇三(傳説)	スホの白い馬
おのき がく	かたあしだちょうのエルフ
かこ さとし	よわいかみつよいかたち
	からすのパンやさん
角野 栄子	魔女の宅急便
神沢 利子	ふらいばんじいさん
	ちびっこカムのぼうけん
こうみょうなおみ	ひとつぶのえんどうまめ
五味 太郎	ことばのあいうえお
斎藤 洋	ぶたぬきくん
	ルドルフとイッパイアッテナ
斎藤 隆介	半日村
	ソメコとオニ
	ペロ出しチョンマ
	花咲き山
佐藤 さとる	おおきなきがほしい
佐野 洋子	100万回生きたねこ おじさんのかさ
田島 征三	とべバッタ
	しばてん
	はたけのともだち
	やぎのしづか
田島 征彦	ふきまんぶくてんにのぼったなまず
	じごくのそうべえ
	てっぽうをもったキジムナー
谷川 俊太郎	いちねんせい
	誰も知らない
つちや ゆきお	かわいそうなぞう

寺村 輝夫	王さまシリーズ
那須 正幹	ズッコケシリーズ
中川 李枝子	ぐりとぐらシリーズ
	いやいやえん
新美 南吉	手ぶくろを買いに
	おじいさんのランプ
浜田 広介	ないた赤おに
	りゅうのめのなみだ
林 長閑	いもむしのうんち
古田 足日	おしいれのぼうけん
	宿題ひきうけ株式会社
松谷 みよ子	モモちゃんとアカネちゃんシリーズ
山下 明夫	島ひきおに
	てがみをください
宮沢 賢治	よだかの星
椋 喬十	片耳の大鹿
アーノルド・ローベル	ふたりはいっしょ
	ふたりはともだち
	どろんこぶた
アンデルセン	童話集
エリック・カール	はらべこあおむし
	おほしさまかいて!
R.S.ガネット	エルマーのぼうけんシリーズ
グリム	童話集
フレイヤー	あなたがうまれたひ
マーカス・フィスター	にじいろのさかなシリーズ
マイク・セイラー	ぱちぱちいこか
レオ・レオニ	さかなはさかな
	フレデリック
P.ロディロ	いっしょにいたらたのしいね

<高学年にぜひ読んでほしい本>

芥川 龍之介	杜子春
	羅生門
	トロッコ
	くもの糸
	白
	鼻
	みかん
有島 武郎	一房のぶどう
	小さき者へ
	生まれ出づる悩み
岩崎 京子	鯉のいる村
梅田俊作、佳子	しらんぶり
井上 靖	しろばんば
	あすなろ物語
	敦煌
井伏 鮎二	山椒魚

松谷 みよ子	ふたりのイーダ
	龍の子太郎
	貝になった子ども
宮沢 賢治	風の又三郎
	銀河鉄道の夜
	セロ弾きのゴーシュ
宮川 ひろ	春駒のうた
	るすばん先生
	先生のつうしんぼ
椋 喬十	孤島の野犬
	クロ物語
	鳩十全集
山本 有三	路傍の石
吉川 英治	三国志
	宮本武蔵
	太閤記

	屋根の上のサワン
今江 祥智	山のむこうは海だった おれたちのおふぐろ
岡田 淳	二分間の冒険 ようこそ、おまけの時間に 雨やどりはすべり台の下で
小川 未明	赤いろうそくと人魚 童話集
乙武 洋匡	五体不満足
川端 康成	伊豆の踊り子 掌の小説
北 杜夫	船乗りクプクプの冒険
工藤 直子	ともだちは海のにおい ともだちは緑のにおい
黒柳 敏子	窓際のトットちゃん
斎藤 悅夫	冒険者たち
佐藤 さとる	だれも知らない小さな国
志賀 直哉	清兵衛とひょうたん 小僧の神様 菜の花と小娘
下村 潮人	次郎物語
高木 敏子	ガラスのうさぎ
筒井 芽乃	娘よここが長崎です
竹山 道雄	ビルマの豊饒
壺井 栄	二十四の瞳 母のない子と子のない母と 坂道
坪田 譲治	風の中の子供 子供の四季 赤い鳥傑作集
富山 和子	川は生きている 道は生きている 森は生きている
長崎 源之助	ゲンのいた谷
那須田 淳	ボルピィ物語
夏目 漱石	坊ちゃん
新美 南吉	うた時計 牛をつないだ椿の木
灰谷 健次郎	兎の眼 太陽の子
星 新一	ようこそ地球さん ほら男爵現代の冒険
三浦 哲郎	ユタと不思議な仲間たち

	新平家物語
吉野 源三郎	君たちはどう生きるか
湯本 香樹実	夏の庭
アンデルセン	絵のない絵本
O.ヘンリー	最後の一葉 短編集
ウェブスター	あしながおじさん
エンデ	モモ はてしない物語
カニグズバーグ	クローディアの秘密
ケストナー	エミールと探偵たち 飛ぶ教室 ふたりのロッテ 少年文学全集
コナン・ドイル	シャーロック・ホームズシリーズ
サン・テグジュペリ	星の王子さま
シートン	シートンの動物記
ジーン・アウル	大地の子エイラ
スウィフト	ガリバー旅行記
スティーブンソン	宝島
スピリ	ハイジ
ダーウィン	ダーウィン先生地球航海記
デ・アーチス	クオレ
ディケンズ	クリスマス・キャロル
トラヴァース	風にのってきたメアリー・ポピンズ
バーネット	小公子 小公女 秘密の花園
ピクトル・ユーゴー	ああ無情(レ・ミゼラブル)
ファーブル	ファーブルの昆虫記
ヘミングウェイ	老人と海
ベルヌ	二年間の休暇(十五少年漂流記) 海底二万里
ヘルマン・ヘッセ	車輪の下
マーク・トウェイン	王様とこじき トム・ソーヤの冒険
モンゴメリー	赤毛のアンシリーズ
リンドグレーン	長くつ下のピッピ
ルイス	ライオンと魔女
ロフティング	ドリトル先生シリーズ
ワイルダー	大きな森の小さな家シリーズ
ワイルド	幸福の王子 童話集